

平成17年度個人評価の集計・分析並びに自己点検評価項目等について

1. 個人評価の実施状況

1)対象教員数，実施者数，実施率

対象教員数（人）	実施者数（人）	実施率（%）
7 (教授2、助教授2、講師3)	7	100

2)教員個人評価（試行）の実施概要

評価組織	低平地研究センター 個人評価専門委員会
構成	荒木宏之（センター教授／センター長） 林 重徳（センター教授／副センター長） 外尾一則（理工学部教授／副センター長） 武田 淳（農学部教授／副センター長）

実施内容と方法：

- ①任期付き教員を含む全教員を対象とした。
- ②低平地研究センター個人評価実施基準、同指針に基づき、評価項目とそれらの重みを各自が設定。
- ③実施対象期間は平成17年度とし、活動実績の様式に活動実績を記入し（添付資料で明らかな場合は必ずしも記入を要しない）、それに基づき自己点検・評価を行い提出。
- ④評価専門委員会を平成18年6月1日に開催し（出席者：荒木、林、武田）、提出された評価資料をすべて点検・評価し、委員会の評価点、コメントを集約。

添付資料：

- ①低平地研究センター個人評価実施基準
- ②低平地研究センター個人評価実施指針
- ③個人目標申告書（様式1）、活動実績報告書（様式2）、自己点検・評価書（様式3）・評価結果（様式4）の各フォーマット

2. 評価領域別の集計・分析と自己点検評価

(1) 研究の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析

① 論文数

	年間一人当たり平均	最少	最多
学術論文	7.7	2	20
審査付き学術論文	6.7	2	20
講演発表論文（学術）	7.7	0	16

・教員によって論文数には大きな幅があったが、審査付き論文がない教員はいない。

② 学内外共同研究、国際共同研究

・全員がいずれかまたは両方を目標項目に設定し、かつ 100% 達成している。

③ 競争的資金

・全員が研究代表者として申請、獲得率も高い。

④ センター業務と連携した研究

・全員が業務と密接に連携した研究を行っている。

2) 研究の領域における教員の活動評価集計と分析

・自己評価（達成率）は平均 87.9% であった。各評価項目とも概ね目標を達成している。

・審査付き論文、国際シンポジウムへの投稿数に関してもっと努力の余地があるとする教員がある、自己評価で低い点数をつけていた。

・外部資金の申請は全員が行っているが、獲得できなかった点を低く評価していた。

3) 研究の領域における部局等の自己点検評価

・少人数でありながら十分な業績を達成している。

・他の評価領域（特に、社会貢献、国際貢献）の過剰な負担のため論文作成・投稿に支障が出ている場合があり、個人およびセンターとしての業務分担や人的資源の獲得などを模索する必要性が依然として認められた。

・平成 16 年度までの自己評価を勘案して目標を高く設定し、達成に地づいた教員もおり、自己点検評価の効果が現れた（H16 年度 85.0% → H17 年度 87.9%）

(2) 教育の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析

①教養教育／学部教育科目担当

・有資格教員全員が教養教育一科目と理工学部の講義を一科目または複数科目担当している。

②大学院授業担当

・有資格教員全員が2科目以上を担当している。

③大学院学生数

	博士主指導	博士副指導	修士主指導	修士副指導
有資格者一人当たり年平均	2.5	0.5	4.0	2.3

・表の通りであり、年に2.5名の博士学生、4名の修士学生を指導している。

④学生生活指導，FD活動，教育改善の取り組み

・いずれの項目に関しても全員が個々人の工夫で取り組み、平均的な成果を上げている。一般的にはFD講演会などへの参加に余地があるとも言える。

2)教育の領域における教員の活動評価集計と分析

・自己評価（達成率）は平均94.3%であった。

・教養教育、学部教育、大学院教育の各評価項目ともに積極的に取り組み、十分に目標を達成している。

・合格率の向上を基準とした教育の自己点検評価をしている教員がおり高く評価できた。

・指導学生の受賞、授業評価の良好な結果など具体的な成果として達成率を評価している教員がおり、高く評価できた。

3)教育の領域における部局等の自己点検評価

・本センターは研究センターであるので学部教育の負担義務は基本的にはないが、実際にはそれも含めて本学の教育に十分に貢献している。

・僅かではあるがH16年度よりも全体の達成率が低下した（95%→94.3%）のは、任期付き教員の講義、学生指導範囲などが明確でなかったためであり、改善が望まれる。

(3) 社会貢献の領域

1)評価項目ごとの実績集計と分析

①学会の役員、審議会などの委員

・全員が、国、県、地方自治体、関連学会などの委員長、委員、幹事など複数に就任してい

る。一人平均 8.9 件であった。

②低平地研究会 (LORA) の運営

- ・全員が運営委員長、委員、幹事長、部会長として運営に参画し、研究会を通して地域に貢献している。

③国内研究集会の開催に貢献する

- ・全員がセンター主催の市民フォーラム、地域コンソーシアム成果発表会、低平地研究会研究成果発表会などの企画、運営、講演などに貢献している。

④学外からの依頼講演など

- ・全員が小中高校等への出前講義、学協会等からの依頼講演のいずれかを引き受けている。

2)社会貢献の領域における教員の活動評価集計と分析

- ・自己評価（達成率）は平均 101.4%であった。
- ・中には達成率が 120%とする者もあるほど十分な社会貢献を達成している。

3)社会貢献の領域における部局等の自己点検評価

- ・いずれの項目においても十二分の活動実績がある。
- ・少人数の研究センターでありながら、全員が社会貢献領域の活発な活動を展開しており全く申し分ない。

(4) 国際交流の領域

1)評価項目ごとの実績集計と分析

①国際会議の開催、参加

- ・センターでは「国際低平地研究協会 (IALT)」を主宰しており、運営委員、編集長、幹事長兼会計として、英文学術誌の年 2 回発行、シンポジウム開催などの運営に貢献している。
- ・センターでは 2 年に 1 回、国際シンポジウム (ISLT) を主催しており、全員が実行委員長、論文委員、ローカル委員などとして積極的に参画している。
- ・上記以外に国際的な学会（粘着性底質の輸送）を本学に誘致し開催した。
- ・国際会議への投稿・発表・参加も積極的である。

②留学生の受け入れ

- ・留学生に関しては教授が主指導となるケースが多く、それ以外では少ない。教授の平均指

導留学生数は0.5人であった。

2)国際交流の領域における教員の活動評価集計と分析

- ・自己評価（達成率）は平均98.6%であった。
- ・各自十分に達成している。

3)国際交流の領域における部局等の自己点検評価

・自らの国際学会を中心的に運営し10年間以上継続して国際交流活動を展開していることや、海外の大学との共同研究や世界の低平地域との交流も活発であり、申し分ない。

(5) 組織運営の領域

1)評価項目ごとの実績集計と分析

- ・全学委員の役割はセンターの特性上少ないが、数人は教養教育運営機構の部門幹事、安全衛生委員として貢献している。
- ・センターの運営に関しては、全員が毎週開催のセンター会議、運営委員会に参加し、また、センター内各種委員会（業務分担）に各教員が責任をもって当たっており、個人ごとの目標達成度は高い。

2)組織運営の領域における教員の活動評価集計と分析

- ・自己評価（達成率）は平均97.1%であった。
- ・各自十分に達成している。

3)組織運営の領域における部局等の自己点検評価

・少人数の組織であり、全員が重要な業務分担をしている。平均的にも過重な負担が認められるし、身分以上の責任が負わされる場合もあるものの、概ね良好に遂行されている。

3. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

1) 総合的な集計・分析結果と部局等の自己点検評価

	平均	最低値	最高値
研究	87.9	80	100

教育	94.3	90	100
社会貢献	101.4	90	120
国際交流	98.6	90	100
組織運営	97.1	90	100
平均	95.9	88	104

- ・各教員の総合的な評価点（達成率）は95.9%である。
- ・若手教員に達成率が若干低い者が見られたが、これはセンター業務全体が過重となっている部分があるためとも言えるが、個人評価制度を有効に活用し各領域のバランスを考慮して今後努力してもらいたい。

2) 個人評価に関する構成員からの意見を調査している場合は、まとめたものを添付

- ・なし

3) 次年度の個人評価実施に向けての改善案が策定されていれば、それも記載

- ・なし

4) 段階評価試行結果の検討（意義，有効性，活用方法などに関して）及びこれに代わる総合的活動状況評価の集計・分析方法の提案など

- ・なし

以上